

結山者の道
四 宿り石



山折



これは植物との結びを修復する試練。

真の結山者は山の植物や木々、石や土とも会話をしていたという。
そして、彼らが元氣でいられるように、

時には手助けもしてきた。

しかし、結山者見習いは、感覚をとぎります必要がある。

「枝葉道」は、自然と手を結ぶために必要な感覚を身につけ、

植物と会話ができるようになるための試練。

目を閉じる、あるいは触れることなく、

三本の枝を「げんき」から「おとなしい」へと順に並べる。

一○二人一組になって、役割を決める



二○枝を集める



目の役●手で触れず、目で見て枝を選び、並べる。
手の役●目を閉じて、手の感覚だけで枝を集め、並べる。

三○横に並べて「枝の道」をつくる



それぞれが自分の三本の枝を、
以下の順で横一列に並べる。
このときも「手の役・目の役」として並べる。

五○役割を交代して「葉の道」をつくる



それぞれが、
この枝が「げんき」あるいは「おとなしい」と
感じた理由を語り合う。

六○使った枝と葉を集める



【時間があれば】
役割を交代し、今度は以下の三種類を集めて並べる。
終わったら「葉の道」も眺め、
それぞれの感じ方や印象を話し合う。



山折り



動物との結びを修復する試練。

この山や周辺の山に生きているのは、人だけではない。山には、人以外の住民も多く暮らしている。

真の結山者は、かつて熊や鹿とよく遊んでいたという。あそびのなかで彼らの感覚に近づき、彼らを理解し、ともに生きるための調和を保っていた。

この試練は、失われた動物と結ばれ直し、

山のいきものに成りきる力を取り戻すこととする。

「気配がバレてはいけない、だるまさんが転んだ」のようなあそび。

鹿役と狩人役に分かれ、静けさと気配のやりとりを通じて試みる。

一○靴下を脱いで、裸足になる

ためらいがあつても構わない。
山をより深く知るために必要な感覚を、
足の裏で受け取る。



二○山肌を感じて、試練に備える

温度○冷たい場所、暖かい場所を足裏で感じる
踏圧○歩いて土にのめり込む感覚に意識を向ける
鹿役○これを「踏圧＝踏む圧力」という
いろいろな場所○草の上、石の上など、
異なる質感の上を慎重に歩く



三○役割を決める

鹿役○一人（目を閉じて座る）
狩人役○二人（四つ足で近づく）
審判役○一人（時間を計り、勝敗を判定）
搅乱役○余つた者



四○狩りのルール

狩人役○四つ足で移動し、三分以内に鹿にタッチすれば勝利
※鹿のよう四つ足で歩くことで、人の気配を消すこと
鹿役○気配を感じたら、狩人のいる方向を指さす
※指差は一人二回まで
判定○指差した直線上に狩人がいれば、鹿の勝利



五○開始位置につく



六○搅乱ルール



鹿役○目を閉じて並んで座る
狩人役とその他○鹿役から五メートル以上離れる

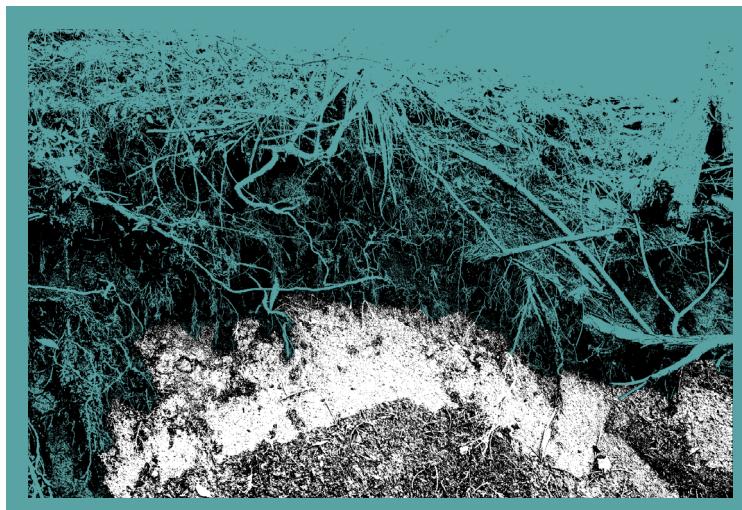
搅乱役は一人一回のみ、
石や枝を投げたり、音を鳴らすなどして、鹿を搅乱してよい。

【注意事項】

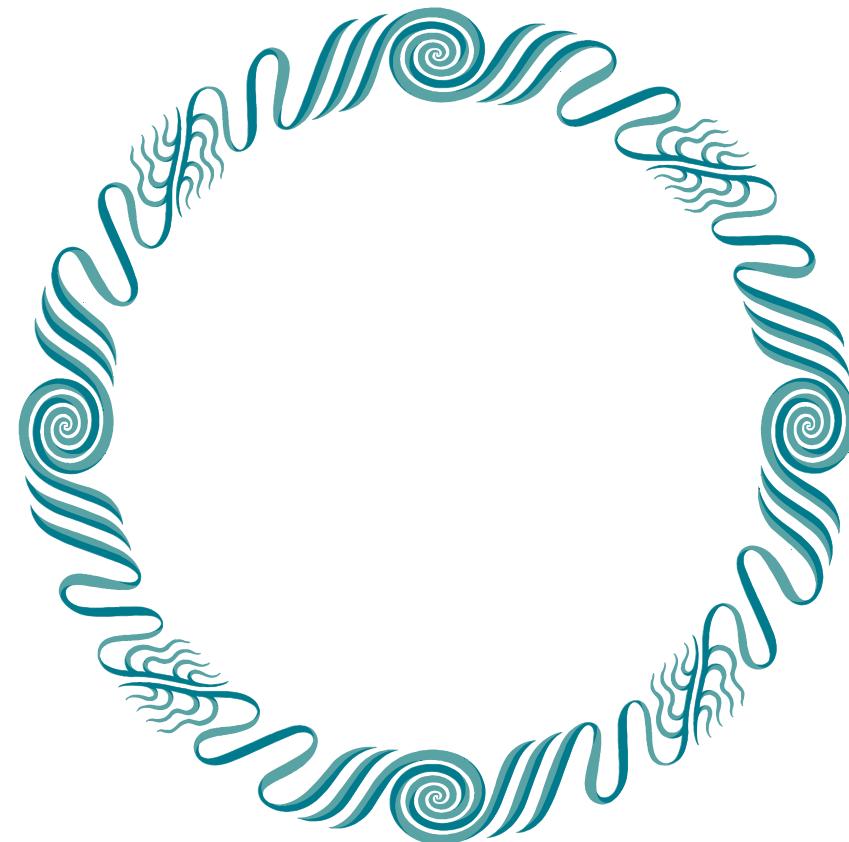
・裸足になる際は、足を怪我しないよう注意を払うこと
・登山者が近づいてきた場合、審判役は試練を一時中断するよう呼びかけること



結山者の道
七
根叫びの地



山折り



水と土の結びを強める試練。

雨が降ると、水は斜面を勢いよく流れ落ちる。

その力が強いほどに、土も一緒に流されてしまう。土が失われると、道も山も痩せてゆく。植物が根を張る土がなくなり、山は少しづつ力を失っていく。

真の結山者は、大きな丸太を抱え、土や植物なき場所を補修していた。

山の再生を支えてきた。この試練では、小さな動きから始める再生の技を身につける。

古来より受け継がれてきた技——『水土流（すいどる）』。

落ち葉と小枝で「土留め（ダム）」をつくり、水の流れをゆるめる。

それによつて、水と土をもう一度、つなぎなおす。

一○場所選び

二○土留め（土のダム）をつくる

水みち——水が流れていく斜面を見つける。

よく観察し、自分が土留めをつくる場所を決める。

三○完成後、水を流して効果を確かめる

まずは、何もない普通の斜面に水を流し、その速度を観察する。

つづいて、各自が作った土留めに、

麓で汲んできた水を上手側から流す。

水の流れが「ゆっくり」になるか、目で見て確かめる。



観察ポイント

「なぜうまくいったのか」

「なにがうまくいかなかつたのか」

感じたことをみんなで共有する。

一人ひとりが、周囲に落ちている枝、落ち葉、石などを拾い集め、それらを使って、水の勢いをゆるめるための「土留め（ダム）」をつくる。

第一の試練で使った枝葉が残つていれば、それも活用してよい。

全員が作り終えるまで、じっくり時間をかける。

注意○落ち葉をすべて取つてしまい、土がむき出しにならないように注意すること。



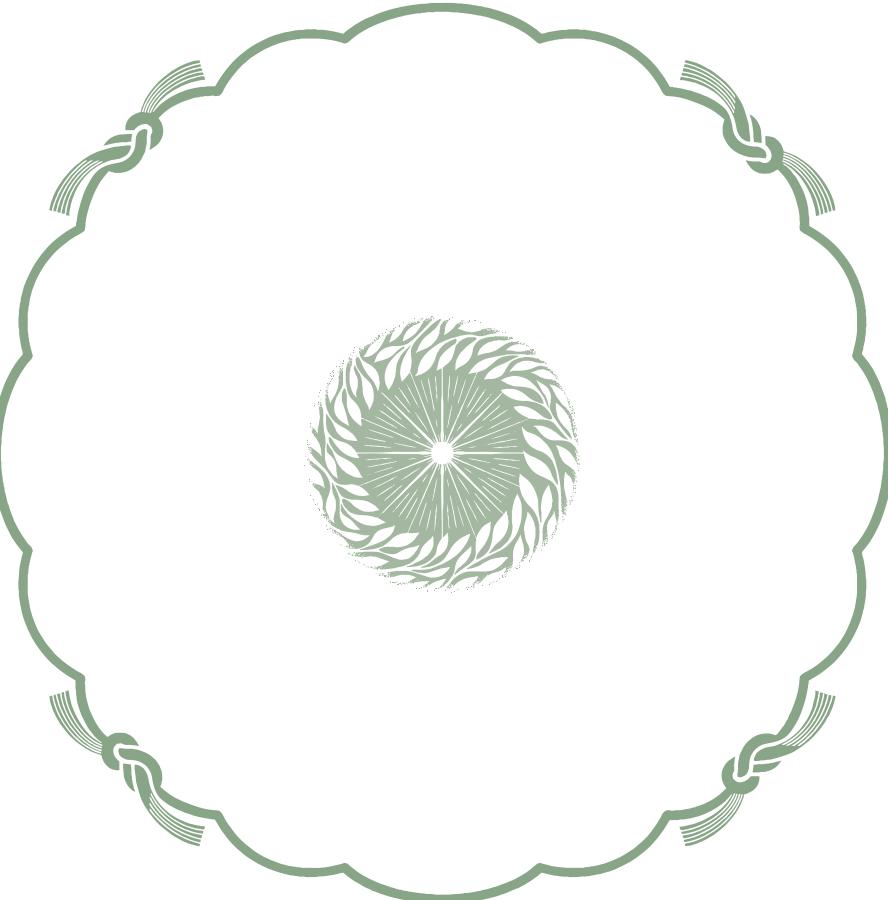
- ・水の流れがどう変化するか
- ・水がどれだけ土に浸み込んでいくか
- ・土留めが、水の勢いをどう和らげているか



結山者の道
八宿り石



山折り



山全体と自らを結び直す、最後の試練。

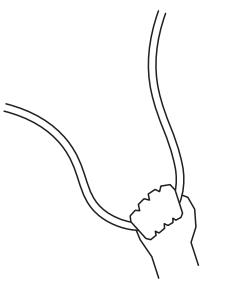
植物との結び、動物との結び、水や土との結びを取り戻した今、いよいよ、山全体と自らを結び直す時がきた。

この試練では、自身の結山者名のもとになつた要素——風、土、根、水、雲、実、葉など——そのものになりきり、それぞれの要素がどのように関係し合つていて語るのかを感じ、

その視点から山について語る。かつて聴かれていた山の声に、もう一度耳を傾け、

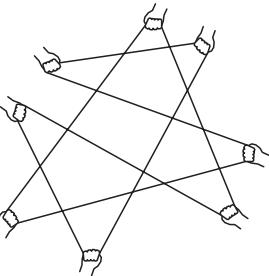
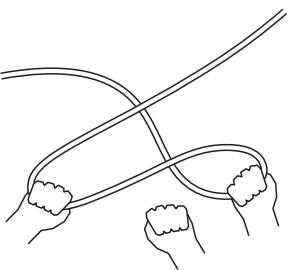
その声を己の言葉で語る術を取り戻す。

一○始まり



ここから語りと結びが始まる。
紐がある場合○進行役が片手で紐を取る。
紐がない場合○順に手をつないでいく。

二○関係する者が紐を取る



三○次々と繋がる

進行役の結山者名に関係する要素を持つ者が、片手で紐を取りながら、自身とのつながりを語る。

例 進行役が「土」の要素をもつ場合
「私は葉語り。葉っぱは分解されて土になる」

- 関係する要素を見出した者が、さらに紐を取る
- 取るたびに、その関係性を語る
- 一人につき最大二回まで
- 全員が繋がるか、繋がりが見つからなくなつたら一旦終了

四○山語り（五分）



進行役から順に、自身の結山者名になりきり、見えた山の景色について語る。

語り方○「私は○○（要素）…」で始める。

語る内容○その要素と他の要素との関係から

具体的○「私は根。地下では皆が手を繋いでいる。

見えないけれど、山のみんなを支え合っている」

「私は水。山のてっぺんから麓まで、いろんな景色を見ながら旅をしている」

山折り



結山者名

根継ぎ

ねつ

風走り

かぜばし



カット

草歌い

くさうた

実守り

みも



空聴き

そらぎ

岩抱き

いわだ



五人以上で遊ぶ場合に追加する結山者名

→ 基本の結山者名

土詠み

つちよ

水透き

みずす



鹿宿り

しかやど



はがた

葉語り

はがた